

梅雨の晴れ間のウォーキング。見事なあじさいとツバメの巣を発見しました。ツバメが家に巣を作ると縁起が良いと言いますが、見つけるだけでも気持ちがほっこりします。

現在会員登録数 4,076 人さま。次号は 7 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国イベント紹介

【4】プレゼント

■-----
【1】お知らせ

● 研究紀要の原稿募集

当財団では「大阪国際児童文学振興財団 研究紀要」第 37 号の原稿を募集しています。応募締切は 10 月 31 日（火）です。 詳細は↓↓

http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/04_journal/boshu.html

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

*年間 1 万円以上ご寄付いただいた方には、イイクロちゃんグッズをプレゼントしています。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/@iiclol196>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■-----
【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Satoko's Talk

『夏に、ネコをさがして』西田俊也/作 スカイエマ/カバー画 徳間書店

* 今回のゲストは当財団の特別専門員である小松聡子さん（S）です。

* 作品の結末まで書かれています。

あらすじ：小学6年生の少年、佳斗（けいと）は、母方の祖母である夏ばあが亡くなった家に、夏休みに両親と引っ越すことになった。母は夏ばあがかわいがっていたのらネコのテンちゃんにえさをやり続けていたが、佳斗が引っ越してからテンちゃんが行方不明になる。テンちゃんを探す過程で、同級生で、タイ人の母と寿司職人の父、認知症の祖母がいる蘭という絵のうまい少年と友だちになって、テンちゃん探しを手伝ってもらい、近所の老人たちとも知り合いになる。

Y：ネコのテンちゃん探しというミッションはあるものの、大きなドラマが起きるといふより、佳斗が蘭と町の中を歩く中で、夏ばあのことを思い出したり、自分の家族のことについて考えたり、蘭の家族とのかかわりについて考えたりすることが丁寧に描かれている点が、静かな時間が流れているように感じておもしろかったです。

S：佳斗は、蘭や、夏ばあを知っている町の人たちと出会ってつながることで、夏ばあを失った喪失感や寂しさが少しずつ薄れていき、夏ばあは心の中で生きていると思えるようになります。

Y：夏ばあが亡くなってからストーリーは始まりますが、佳斗や佳斗の両親や近所の人たちの記憶から夏ばあが感じられます。私も読みながら、夏ばあに出会った気持ちになりました。

S：この作品には、もう一人、重要なおばあちゃんが登場します。

蘭のおばあちゃん、認知症。12歳の佳斗と蘭の視点からおばあちゃんが描かれているので、読者も認知症のことが理解しやすいと思いました。

そして、佳斗から見るとネコのように自由に生きていると思う蘭にも葛藤があったことが作品の中で明かされます。最初は認知症のおばあちゃんのことを受け入れられず、飼っていたネコの死も受け止めることができなかつたこと、そこから、「ばあちゃんはどんなふうになってもオレのばあちゃんだと思えるようになり」、最後は、捨てネコを引き取って飼う決心をします。そういう意味では、この作品は、蘭の成長の物語でもあります。

Y：蘭のおばあちゃんは、記憶が行ったり来たりしますが、その中で、戦争のときの記憶もペットが取り上げられたエピソードとして語られます。「記憶」のバトンを蘭や佳斗が受け継いでいるんだと思いました。

S：蘭のおばあちゃんについて言えば、おばあちゃんが夜にいなくなって、見つかって帰ってきたときに、蘭のお母さんが、「ばあちゃん、お帰りなさい。長いお散歩、なにかいいことありましたか？」と聞くと、おばあちゃんが「みんなで歌をうたったのよ。月がきれいでね。月にはウサギがいるんだってね」と答え、お母さんが「ええ、きっといるんでしょうね」とやさしく答えます。読んでいて、温かい気持ちになりました。

Y：本当に。そういう意味では、佳斗の家族も愛情豊かです。佳斗のお父さんはジャズピアニストで、それだけでは生計がなりたたないのでスーパーでパートをしており、お母さんは、書道の墨を作る会社で働いています。お父さんは結婚前にお母さんに曲をプレゼントしており、その曲をお母さんは今も大切にしています。厳しい環境にあっても、愛されることで、人を愛することができるということが描かれているようにも思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

まだ出られない夢

「うすい鼠がかった光がそこらいちめんほのかにこめていた。」—「花椰菜」の書き出しです。賢治の「初期短篇」の一つで、「初期短篇には、夢や眠りをテーマにしたものが多い。」(押野武志「初期短篇綴等Ⅱ」2003年)といわれます。これもまた、夢のなかの景色です。

粗末な白木の小屋に座っている「私」は、「髪のもじゃもじゃした女」と話しながら、しきりに横目で外を見ます。それが「自分の役目」だということです。「役目」とは何でしょう。外の真っ黒な腐植土の畑には、灰色の花椰菜が光って百本ばかり、トマトの葉もくしゃくしゃにからみあっています。花椰菜はカリフラワーのことです。「ロシア人やだったん(モンゴル族の一部族、タタールの音訳。韃靼—筆者注)人」が往来していますが、若い男が「私」をさぐるように見えています。

〈私と瞳が合うや俄かに顔色をゆるがし眉をきっとあげた。そして腰につけていた刀の模型のようなものを今にも抜くようなそぶりをして見せた。私はつまらないと思った。それからチラッと愛を感じた。すべて敵に遭って却ってそれをなつかしむ、これがおれのこの頃の病気だと私はひとりつぶやいた。そして晒った。考えて又晒った。〉

「花椰菜」に「二重見当識」を見たのは、精神科医の福島章です(「作品研究・花椰菜」への討論 1970年)。「二重見当識」とは、二つの矛盾した事柄を同時に認識して不思議に感じない現象だということですが、ここに描かれている、つまらなさや愛、敵をなつかしむというのも、それにあたるのでしょうか。夢のなかでの実感を強く感じさせます。それは同時に、賢治のテクストラしい多様性ともいえそうです。福島章は、冒頭につづいて「そこはカムチャッカの横の方の、」とあるのに、あとで「日本の春の夕方のように」ともいっていることなどを例にあげるのですが。

「私」は、茶色のポケットのたくさんついた上着を着て長靴をはいている自分を見て、また、「役目」を思い出します。そして、横目で作物の発育の具合をながめますが、「役目」とは何でしょう。「私」は、いつか小屋を出て、その小屋は、いつかなくなっています。「私」は、「ホッホッホッホッ。」とさけんで飛び上がり、花椰菜のなかで、すっぱだかになっています。やがて、黒い針葉樹の列をくぐって外に出ます。—「白崎特務曹長がそこに待っていた。」

ここで夢の外に出るのかと思うと、そうではないようです。「私」は、たよらない気もちで「一体何をしらべて来いと云うんだっだろう。」などと繰り返し「役目」をたずねます。(馬車別当)

(本文の引用は、筑摩書房刊『宮沢賢治コレクション3 よだかの星』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 48

その日の朝、ふたりは日の出前にはもう動きだしていた。空は光を拒む濃い色ガラスのようだ。湖のほとりを走るバンの、ガタガタいう音しかきこえない。湖面には色がない。湖のむこう岸に、巨人が横たわっているような丘のシルエットが浮かんでいる。

『ボグ・チャイルド』 シヴォーン・ダウド/作 千葉茂樹/訳 ゴブリン書房 2011年1月 p.7)

『ロンドン・アイの謎』(シヴォーン・ダウド/著 越前敏弥/訳 東京創元社 2022年7月)を読書会で読むことになったので、同著者の『ボグ・チャイルド』を読み直しました。『ロンドン・アイの謎』は、ロンドン・アイ＝ロンドンの大観覧車の目の前で、主人公テッドのいとこのサリムが消えるという事件が起こるミステリーです。『ロンドン・アイの謎』の続編を書いたロビン・スティーヴンスが「序文」で述べているように、『ロンドン・アイの謎』は、ミステリーというのみでなく、家族の物語としてもすばらしい作品で、一文一文が幾重にも読める工夫がされていて、「読む」ことの楽しさを十分に味わせてくれる作品です。

このことは、『ボグ・チャイルド』にも当てはまります。引用は冒頭の3行。ここからこの作品を象徴的に読み取ることができます。まず、「ふたり」と書かれているのが、主人公で18歳のファーガスとタリー叔父。主人公のファーガスが最初に登場するのはわかりますが、作品の脇役に見えるタリー叔父が冒頭から登場し、「ふたり」と言われている訳は、最後まで読むとわかる仕掛けになっています。

空が「光を拒む濃い色ガラス」という表現は、舞台となっている1981年のアイルランドの政治的な状況や、ふたりの重苦しい気持ちを象徴しているとも言えます。というのは、ファーガスの兄がIRA(アイルランド共和軍:アイルランド独立闘争のための武装組織)の政治犯として服役中だからです。このあと、兄は、仲間とハンガーストライキを始め、ファーガスの家族中が心配します。

ファーガスたちが乗るバンは湖のほとりを走りますが、「湖面には色がない。」と表現されます。その前の文のバンの「ガタガタいう音しか聞こえない。」と2回否定形が重ねられることによって、この道程が不穏に満ちたイメージを読者に与えます。そして、湖のむこう岸の丘が「巨人が横たわっているような」と表現されます。

ふたりはバンに乗って、北アイルランドから国境を越えてアイルランド共和国に入り、作業員たちが来る前に、湿地(ボグ)で、ひそかに泥炭を掘り、北アイルランドで泥炭を売る予定です。ところが、ふたりは泥炭の中に死体(ボグ・チャイルド、後に鉄器時代のミイラであることがわかる)を見つけます。ふたりが湖から見た丘がこの泥炭地なのでしょうか。「横たわる」という言葉に「死」をイメージするとすれば、ボグ・チャイルドの死と、ファーガスの兄の死、そして、IRAの爆弾による多くの人の死が重なります。

ファーガスは、ボグ・チャイルドが誰なのかを探るために考古学者のフェリシティと娘のコーラに出会い、兄の友だちから依頼を受けて、国境を越えてあるモノを運ぶことになり、その国境で、若い兵士と知り合いになります。そう考えると、巨人のように横たわる丘は、これから、ファーガスとタリー叔父に起こる困難を象徴しているとも、ふたりに何が起ころうと、自然は悠然と横たわっていると考えることもできるのです。(Y)

《4》 行って来ました！

神戸ファッション美術館で6月25日まで開催されている「デビュー70周年記念特別展 Roots of Kawaii 内藤ルネ展」に行ってきました。この展覧会

では、中原淳一にあこがれ、1950～60年代に雑誌『ジュニアそれいゆ』の表紙と挿絵を担当した内藤ルネ(1932-2007)の原画や雑誌の表紙や誌面、付録、ファンシーグッズなどが展示されています。

展示は、序章「内藤ルネ、夢のはじまり」から始まり、第1章から6章まで、イラストレーター、人形作家、ライフスタイルの提唱者、グッズデザイナーなど、仕事別に内藤ルネの作品を紹介しています。

「第1章 イラストレーター-Kawaiiの源流、ルネガール誕生-」は、『ジュニアそれいゆ』の表紙や記事が多く展示され、「これこそ、内藤ルネの絵だ」と思いました。顔の半分以上もある大きな目、くっきりしたくちびるによって、明るい現代的な少女が、くびれた胴体によって、はかない少女が表現されているのがわかります。

オシャレは、リボンやレースをふんだんに使った少女たちの服装からもうかがえました。文化学園大学の学生らがルネの絵を実際の洋服やドレスとして再現していて、とても美しく、着てみたいと思いました。

ルネは、幼い頃から人形が好きで、人形を作って写真に撮って雑誌の附録の表紙にしたり、雑誌に型紙を掲載したりしています。人形はイラストレーションと同じように、大きな目、にっこりした口で、スタイルがよく、髪型も洋服もオシャレです。展示を見ると、子どもの頃、家で母や祖母が作っていた人形と似ている作品があり、懐かしくなりました。

ハートのトレイにお地藏さんが座っている「恋地藏」さんという陶器や、貯金箱、パンダやトマトなどのシールも家にあったり、お店で見かけたりしたものが多くあり、子ども時代をルネのデザインの中で過ごしてきたんだと改めて思いました。(K)

神戸ファッション美術館

<https://www.fashionmuseum.jp/special/naitorune/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第3回

第1章 坪田譲治先生

その3 『びわの実学校』(続)

坪田譲治先生(1890～1982年)には、子どものころに2度お目にかかったことがあります。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

前号が配信されたあとになって、水藤春夫作成「坪田譲治年譜」(『坪田譲治全集』12、新潮社1978年所収)の1959(昭和34)年(69歳)につきのように書かれていることに気がつきました。

「八月、郷里岡山より名菓白桃を取りよせ、知人・友人らと賞味。以後「桃の会」と称して恒例になる。」

母が語っていたとおりの「桃の会」という名前だったことがわかりました。こ

のことを注にくわえた、連載第2回の増補版をつくりましたから、データを更新します。

同じように、第1回についても、その後確認したことがあって注を増補しました。こちらでも、データを更新します。

第1章「坪田譲治先生」は、今回でおわります。次回からは、第2章「前川康男先生と今西祐行先生」です。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta-3_M154.pdf

【3】全国のイベント紹介

● ぞうのエルマー絵本原画展

会期：6月24日（月）～9月3日（日） 月曜休館

会場：姫路文学館 北館（兵庫県姫路市） 観覧料：有料

オープニング記念講演会「デビッド・マッキー 作品とそのひとがら」

6月24日（土） 13：30～15：00 定員：100人 ※当日先着

講師：きたむらさとし（絵本作家、イラストレーター）

● 日本マンガ学会 第22回大会

会期：7月1日（土）・2日（日）

会場：相模女子大学（神奈川県相模原市）、オンライン

シンポジウムテーマ：再検討「少女マンガ」史

主催：日本マンガ学会 共催：相模女子大学学芸学部メディア情報学科

※一般参加可、有料、要申し込み

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へお問い合わせください

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【4】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『夏に、ネコをさがして』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ(5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/wTrFHBedaw4s3Bus9>

締切は7月10日（月）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — |

下北半島の恐山が一番のお目当ての初めての青森観光。フェリーでイルカに遭遇し、カモシカが線路を横切り観光列車が急に止まるなどのハプニングもあり、とても感動的な旅行でした。何より、長いトンネルを抜けようやく自由に行き来できるようになったことが、一番のうれしさです。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いいたします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

